

思いつくままに

五藤 博

日本青年館の集まりから3ヶ月以上が経ちました。締切日が近づいて、もう10編ぐらい集まったようで、拝読させて貰っています。

私の場合、原研に就職したのは、かなり偶然でした。この年ぐらいから景気が良くなって、求人が多くなってきました。3箇所までは受けてもいいということで、原研(力研と呼んでいました)と工業技術院と電力会社を受けることにしました。原研と工業技術院はほぼ同時に試験があり、採用内定の通知が来ました。翌年の公務員初任給は、9,600円(月額)であることが分かっていて、原研はいくら呉れるかは分かっていなかったのですが、公務員よりは低いことはあるまいと、1日早く通知が来たことをよいことに、これに決めました。入ってみて、月給が11,800円であることが分かりました。繊維関係の民間会社に行った友人は、5年後には月給を5万円にするとされたそうです。本当かなあと考えたことでしたが、本当にそうなったそうです。

1957年10月までの7ヶ月は、理研分室に勤務しました。この間、中野の学生用下宿に住みました。2食付で月額6,000円。税金も引かれるし、電車賃も要るし、足りないのです。学生時代は、家から毎月5,000円ぐらい、奨学金が3,000円、家庭教師などで2,000~3,000円、住まいは県人寮と順調でしたが、雲泥の差でした。親に泣きついたら、もう卒業したんだからと冷たく断られ、恨めしく思ったことでした。しかたなく、電気試験所に入った片岡君に何千円か借りて過ごしました。

私たちが入ったときには、労働組合がすでにありました。あとで聞いたことですが、職員組合と名乗るか、労働組合と名乗るかを検討した結果、姿勢を示すために、労働組合にしようということになったそうです。その当時は執行委員の任期は半年、9月に改選でした。理研分室からも誰か出せということで、私が選出されました。委員長は八剣達雄さん。理事長は安川第五郎氏。JRR-1の臨界が8月27日。その後、正力松太郎国務大臣・科学技術庁長官出席の祝賀会の日程が決ったあたりから急にあわただしくなりました。私が、移転対策担当に指名され、東海村に2度ほど行きました。研究棟が10月から使えるようになり、すでに東海研究所勤務になっている先遣隊に追加して大勢の職員を東海に移駐させることになっていました。道路はまだ舗装されず、先遣隊は、いろいろの不便に悩まされていました。何が不満か明文化されたものはありませんでした。晴れの日に向けて労組がストライキをするという話になりました。また、当日の弁当に2種類あり、一般はBクラスということで、不平の声が上がったなどということも耳にしました。日本で初めての原子炉ということで世間の注目も集まっていました。問題が山積していたので、ストライキを背景に解決を図るということに自然になったようでした。理事者側は全面的に要求を呑むということになり、それから要求を文書化したのでした。暖房設備の能力とか、食事の量質も文書化しました。質の文書化には苦労しました。「常食に耐える風味を有すること」などと表現したことが思い出されます。

私たちが生きた時代は、どんな時代だったのでしょうか。敗戦は国民学校5年生のときで

した。5年生からは剣道が授業に入ってきました。大きくなったら戦争に行くものだと思っていました。少年飛行隊という本を読んだ覚えがあります。泳げなくてはだめだと書いてありました。本の最後には給料のことが書いてあって、昇給しても将官よりもずっと低いところで頭打ちになるようになっていてがっかりしたことを覚えています。

敗戦によって、学校からは日本の歴史を学ぶ機会をもてませんでした。高校では、日本史も取ったのですが、先生は名調子で江戸時代までをやったのですが、近代史は聞けませんでした。県人寮では、毎年、霊山護国神社の坂本龍馬、中岡慎太郎の墓掃除をするのですが、そこで初めて龍馬・慎太郎のことを知りました。

昭和10年生まれ私には、大正はすでに過去であり、明治は大過去でした。日本は道を誤ったのだし、受け継ぐべきものはあまりないと思っていました。村や家には、神様や仏様が沢山いました。山には山の神様、井戸には水神様、土間にはおくど様、…。柱には「茶」の字を逆さに張ったムカデよけのお大師様のお札。毎月開かれる大きな数珠をたぐる講の集まり。これらをどう考えるか態度を迫られました。神仏はいないことにしようというのが明快な態度でした。本当は居たら罰が当るかもしれない。当っても仕方ないと決断したことを覚えています。

物心ついた時は、物が払底していた時代で、チョコレートも知らずに小学校(国民学校だった)を卒業しました。だから、それからの世の中の変わりようは余計目立ちます。

私よりも2、3年前に世に出た人達は就職に苦労したと聞いています。もっと若い頃、米作りや養蚕を手伝ったことがあります。こんな割の合わないことは御免だと見切りをつけたものでした。団塊世代の方々は、私たちよりも数年遅く、金の卵ともてはやされて農業に見切りをつけて集団就職したものでした。

原研の就業規定では、定年は55歳でした。入所した頃には、私は、ほとんど関心を払いませんでした。定年60歳で退職するとき、われわれの世代は38年働いて、平均37年間働かないで暮さして貰えるのか、と感心したものでした。

近所の人や親戚の束縛にも古さを感じ、捨ててきたものでした。当今、近所の若者が知らん顔をして通り過ぎても、これは、50年前に私たちが始めたことだと観念します。

齢70歳を越えて、生まれた年が明治68年に当ることが、想起されます。明治ってそんなに古くはない。幕末だって、逆転させれば、私のスパンに入るのではないかと、という思いが強くなるこの頃です。

司馬遼太郎氏は、どこかに自らの体験から昭和の軍隊が建前主義に陥り、張りぼてのような戦車を配置していたことを述べ、明治の偉人はこうではなかったろうと書いていました。偉人のいた明治から数十年後に、200万人に及ぶ国民の死を招く無謀な戦争に突き進むことになってしまいました。この流れにまつわる問題は、われわれにとって、宿題として残されたままになっているような気がします。日本国憲法が公布されてから61年。2006年9月、「戦後レジームからの脱却」を旗印に第90代首相に安倍晋三氏が就任しました。この数年のうちに、この宿題にどう決着をつけるかが明らかになるような気がします。材料は揃っています。また、程よい賞味時期にも来ています。運よく永らえれば、その流れの行く末を見定められるものと期待しております。(2006年7月31日記)